

## 特別講演会

「コウノトリと共生する農業への挑戦～コウノトリが教えてくれたもの～」

〔講師〕

兵庫県農政環境部農業改良課 参事

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科客員准教授

西村いつき氏

本日は「コウノトリと共生する農業への挑戦～コウノトリが教えてくれたもの～」と題して、兵庫県北部の但馬地域で、コウノトリ野生復帰とリンクした形で広がっている“コウノトリ育む農法”のお話をいたします。また、この農法が広がり地域が少しずつ変わりつつある様子も交えながらお話ししていきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

これからお話しする内容には、神戸大学名誉教授で「コウノトリ野生復帰連絡推進協議会」会長でもある保田先生からいただいた、「環境が汚れたら食べ物が汚れる。食べ物が汚れたら体が汚れる。そして一番被害を受けるのは未来を担う子供である」というお言葉が根底に流れています。

島根県にもコウノトリが飛来しておりますので、皆さんコウノトリのことはよくご存じと思いますが、ビデオで少しコウノトリの様子を見ていただきたいと思います。

(動画上映)

動画が古いので、豊岡がクローズアップされていますが、現在この取り組みは豊岡市だけではなく、兵庫県北部但馬地域、養父市、朝来市、新温泉町、香美町に広がっています。また、稲作技術も年々進歩して、当初の技術から随分変化しています。

島根県の皆さんはコウノトリを頻繁に見ていらっしゃるの、よくご存知かと思いますが、羽を広げると2mになる大型のとても綺麗な鳥です。よくタンチョウが松の木にとまっている絵をご覧になったことがあるかと思いますが、タンチョウは足の構造上、木にとまることはできません。しかし、コウノトリは木にとまることができます。これらの絵はタンチョウとコウノトリを間違えて模写したものではないかと言われています。

また、タンチョウは甲高い声で鳴くことができますが、コウノトリは声帯が退化して鳴くことができません。そのかわり大きな嘴をカタカタカタッと鳴らして求愛行動をします。このカタカタッという音をクラッタリングといいますが、それが機織りの音に似ているので、鶴の恩返しという民話に出てくる「ツル」はタンチョウではなく、コウノトリ

ではないかと言われています。実際、但馬地域ではコウノトリが再び蘇って地域に色々な恩返しをしてくれているわけですが、また、後半にこのお話をさせていただきたいと思います。

タンチョウは穀類も食べますが、コウノトリは100%肉食です。ドジョウ、フナ、バッタ等を一日500g程食べて生きています。

赤ちゃんを運んでくるコウノトリ、これはヨーロッパ大陸のもので日本にいるコウノトリとは種が違います。日本にいるコウノトリは **Oriental White Stork** といい、ロシアのアムール川周辺で繁殖し、越冬地を求めて中国へ渡っていきます。この間に韓国や日本にも立ち寄りますが、少し横着な鳥のようで、立ち寄った所が住み心地が良いと渡りをやめ、1年中そこに住みつく、そういう鳥です。

コウノトリは、昔は日本各地に生息していました。大阪の弥生時代の遺跡からもコウノトリの足跡が見つかっていて、昔から日本各地で見られた鳥だったことが分かります。しかし、明治時代になり、狩猟法が変わったことでコウノトリはどんどん乱獲され、個体数を減らしてしまいました。その後、残念なら兵庫県と福井県のみが生息するようになり、最終的に兵庫県が絶滅の地となってしまいました。

コウノトリの絶滅の要因は、このように個体数が減ったことと、第二次世界大戦中にコウノトリが巣を作る松の木が油を搾るために伐採され、すみかを失ったことです。戦後人工巣塔を建てましたが、その下で農薬が使われるようになり、コウノトリの食物になる生物が減ってしまいました。また、農業基本法ができ、効率の良い農業をするために圃場整備がどんどん進められて、コウノトリの食物となる生き物がすみにくい環境ができてしまいました。

これらに加えて、一番大きな問題として農薬の生物濃縮が挙げられます。農家の皆さんが正しく農薬を使ってもそれがプランクトンに吸収されると265倍に、このプランクトンを食べる小型魚類の体の中では500倍に濃縮されています。小型魚類を食べる肉食性の鳥類、コウノトリもこれにあたりますが、80000倍に濃縮されてしまいます。兵庫県では昭和30年代に山階鳥類研究所の山階博士が、「あなたの県にはとても貴重な鳥がいるので、保護してください」と当時の阪本兵庫県知事をお願いされました。兵庫県では昭和30年代にコウノトリの保護活動をはじめたのですが、高度経済成長時代の当時、コウノトリのために農薬を使わないという選択肢はありませんでした。自然界での保護・増殖を諦めて昭和40年代に人工飼育に切り替えました。人工飼育されたコウノトリのペアからは55個の卵が生まれましたが、その内半分は無精卵、その内半分は写真のように生まれる寸前まで大きくなっていながら、この世に生を受けることはありませんでした。この死んでいったヒナの体の中からは高い濃度の農薬やPCBのような環境ホルモンが見つかっています。

私たち人類は食物連鎖の頂点にいます。コウノトリが種を残せなくなった環境というのは、私たちにとっても決して良い環境ではありません。兵庫県が進めているコウノトリ野

生復帰の取り組みというのは、コウノトリを自然界に返すことが目的ではなく、コウノトリもすめる環境を取り戻すというのが大きな目的です。

長い間人工飼育をしてもコウノトリの雛は誕生しませんでした。ロシアから 6 羽の幼鳥を譲り受けて繁殖に成功しました。2002 年に飼育数が 100 羽を越えたことを契機にコウノトリを自然界に帰そうという本格的な事業がはじまりました。コウノトリ野生復帰連絡推進協議会を組織し、この中に住民の皆さん、企業の皆さん、行政、学識研究者、色々な方に入っただき、コウノトリ野生復帰推進計画を策定しました。

この中で肉食のコウノトリが生きていくための環境づくりが大切だということになり、コウノトリの野生復帰の事業が 2003 年から本格的にスタートしました。コウノトリの絶滅要因だった農林業の変革がこの時期から急速に求められました。しかし、多くの方は野生復帰に対して無関心で、コウノトリの絶滅の要因をお話して「農薬を使わない農業」なんて言っても反応はとて冷やかでした。また、私たち県職員が地域に入って、コウノトリ野生復帰のお話をすると、地域の皆さんからは「あんたらはコウノトリの方が大事ななか」という反発がありました。また、“コウノトリ育む農法”がまだできていませんでしたので、県組織の中でも、「農家の皆さんにリスクを強いることが良いのか？」という議論もたくさんありました。コウノトリの野生復帰を阻む声の中で農業者の方の拒否反応は大きなものがありました。それでも兵庫県は昭和 30 年代からコウノトリの保護活動をはじめ、コウノトリの野生復帰に取り組むまでにたくさんの税金を使わせていただいていたいました。

そこで、コウノトリの野生復帰と地域農業の振興を結びつける施策を推進するために兵庫県の組織の中にコウノトリプロジェクトチームを結成し、コウノトリをシンボルに環境保全型農業を推進していこう、という取り組みが進みました。この中で“コウノトリ育む農法”の技術確立に着手していきました。

2002 年に飼育コウノトリが 100 羽を突破し、2003 年に推進計画が作られました。この中でまだ採食場の整備ができていないにも関わらず、2005 年にはコウノトリを放鳥すると決まりました。そこで私たち農業関係の職員は、2005 年までにコウノトリの採食場を確保しなければならない、という大きな目標の下に、技術確立や農産物を有利に販売する仕組み、地域の皆さんに取組みを支援していただけるような意識の醸成に取り組んでいきました。

通常、色々な問題があってもその問題を解決するために目標を設定し、問題を定義して原因を特定し、解決方法を定めて、結果を出すというのが通常のやり方だと思います。しかし、今回の場合は、問題を定義して即目標がありました。この目標を達成するために私たちは原因を特定して、解決方法を探っていく。従来の活動ではなかなか成果が挙げられない状態でしたが、高い目標を定めて、この目標をクリアするためになんとかしようと、関係機関が一丸となって取り組んでいきました。

“コウノトリ育む農法”の確立と普及についてですが、当時すでに農薬を使わずにお米を作る技術は兵庫県にもありましたが、その中でコウノトリの食物となる生き物を増やすという技術はありませんでした。そこで、意識の高い農家の皆さんと色々な勉強をして実証区を設置しました。兵庫県から「こうしなさい、あしなさい」というのではなく、一緒に実証区に取り組んでいただいた農家の皆さんが、「これだったらできるぞ」という技術をきちんとまとめていって制度や要件を整理していきました。

また、仲間がどんどん増えてきた段階で、JAをお願いをし、生産者の組織化をして2006年に“コウノトリ育むお米生産部会”を結成しました。ここでJAにお世話になれたことがとても大きかったと思います。JAにお世話になるまでは、「一部の変わった農家の人が有機稲作をしている、コウノトリのためにお米づくりをしている」というような見方をされましたが、JAに参画していただくことで、“コウノトリ育む農法”が地域のスタンダードな農法になることができました。また、多くの農家の皆さんに参画していただくという機会を作ることができました。

関係機関での目標の共有化ということで、コウノトリ野生復帰連絡推進協議会の中で、コウノトリとの共生の方法を、コウノトリの郷公園や兵庫県、豊岡市と、初期の段階から検討していきました。“コウノトリ育む農法”についてもJAに入らせていただいて推進をしていきました。現在この取り組みは豊岡市だけでなく、但馬地域3市2町に広がっていますので、部会の方を中心に県の3つの普及センターと3市の部署とJAたじまが一緒になって“コウノトリ育む農法”を推進する体制ができています。

スライドで示した図の、点線より下は普通の農薬や化学肥料を使うお米作りです。点線より上が“コウノトリ育む農法”です。化学肥料の代わりに地元にある但馬牛やブロイラーなどの畜糞の有効利用を図っています。また、農薬を使う代わりに特殊な水管理をすることによって雑草を抑えたり、生き物を増やして害虫を制御したりする取り組みをしています。

1つが冬の田んぼに水を張る冬期湛水です。この冬期湛水をすることで、未熟な有機物が分解されることで微生物が増える。生態系ピラミッドの底辺部分が広がるので、生き物が豊富になります。また、兵庫県の北部は島根県と同じように11月頃から雨が降り、12月から雪が降ります。田んぼがなかなか乾きません。でもこの冬期湛水をすると春、田んぼが早く乾く。春、田んぼが早く乾くので稲わらが早く分解されて根腐れが起りにくくなるという農業面でのメリットもあります。

また、田植え後40日間、深水管理ということを行います。これを行うことによって、田んぼが水生生物のすみかになりますし、ヒエという雑草は水圧に負けて抜けていくため除草効果も期待できます。

但馬地域では6月の下旬から中干をしますが、中干をするとオタマジャクシが干上がって死んでしまいますので、オタマジャクシに脚が生えてカエルに変態するまで中干を延期

します。中干延期をすることで、私たちの調査では 10a あたり 6,000 匹～12,000 匹のカエルが生き残ることがわかりました。このカエルはコウノトリの食物になりますし、カメムシやウンカのような害虫を食べてくれます。これはトノサマガエルがカメムシという害虫を食べるシーンです。カメムシが汁を吸うことによってできる斑点米は、日本では 1000 粒に 1 粒でもあると等級が下がってお米の単価が安くなってしまいます。これを防ぐために農家の皆さんは使いたくないけれど農薬を使うということをされるのですが、オタマジャクシを大量に変態させてカエルが増えることによってカメムシを駆除してくれます。このことを農家の皆さんにご理解いただくのがなかなか大変でした。

カエルを捕まえて、カエルの口の中に棒をさしますと生きた状態で胃袋の中身を見ることが出来ます。1 匹のカエルの中に何頭のカメムシがいるかという調査をしました。その結果、深水管理、中干延期という水管理をすることでカエルが増えて害虫を制御でき、一等米比率が高くなるということを理解してもらいました。技術確立をするために色々な実証ほを設定して農家の皆さんと一緒に技術を組み立てていきました。技術確立にはタイムリーなデータの収集が重要ということです。

この島根県の農業関係の皆さんも有機稲作についてはとてもたくさんの方の知見をお持ちで、有機農作の色々な研究をされています。このような取り組みを通して島根県のコウノトリもすめる環境に寄与する有機農作が進んでいます。“コウノトリ育む農法”では、スライドに示したような技術体系を組んでいますが、この技術体系の中には、抑草技術、害虫の防除技術、お米の安定生産の技術が組み込まれていますし、コウノトリの採食場としての機能改善もねらいとして組み込まれています。これは冬場に雨や雪の多い地域に合った技術体系です。兵庫県の南部には瀬戸内地域もありますが、南部ではこの技術はなかなか通用しません。今、兵庫県では冬に雨の少ない地域でもコウノトリが採食場として利用できるような有機農法の技術を組み立てる取り組みをしているところです。

今では、より多くの地域の皆さんが“コウノトリ育む農法”に取り組んでいただけるようになりました。この表が現在の“コウノトリ育む農法”の要件です。皆さんにお配りしているパンフレットの中に書かれている要件と少し変わっていると思います。“コウノトリ育む農法”は栽培期間中、化学肥料・化学農薬不使用のタイプである、「農薬を使用しないタイプ」と、栽培期間中、化学肥料不使用で農薬を一部使うというタイプの、「農薬使用を減らすタイプ」があります。この「農薬使用を減らすタイプ」で使用できる農薬は普通物に限られているのですが、現在は、普通物の中でもネオニコチノイド系は使用禁止となっています。

このネオニコチノイド系農薬は鳥類の繁殖障害に影響があると神戸大学の星先生が研究されています。その研究成果をもとに“コウノトリ育む農法”では農薬を使用する場合は普通物、ただしネオニコチノイド系農薬は使用しない、という要件が変わっています。兵庫県も国もネオニコチノイド系農薬の使用を禁止していませんが、コウノトリ育むお米生

産部会の部会員の皆さんの総意によってこのように要件が変更になりました。

多様な生きものが“コウノトリ育む農法”を行うことによって見られるようになりまし  
た。深水管理をすることでヤゴが増えます。ヤゴがトンボに変態して9月の下旬になると  
“コウノトリ育む農法”の田んぼからはトンボが沸き立つような様子が見られます。また、  
クモもたくさん発生します。7月の下旬くらいになるとこのようにクモの巣糸が張られ、そ  
の糸に朝露がついて“コウノトリ育む農法”の田んぼだけが朝行くとキラキラ光って輝い  
て見えます。また、魚道の整備も進んでおり、魚道のある田んぼでは魚が遡上して、田ん  
ぼの中に魚が増えます。もちろんこの魚はコウノトリの食物になります。また、冬の田ん  
ぼにはコウノトリはもちろんですが、カモやハクチョウのような水鳥が来て、水鳥の楽園  
になります。このように生き物がたくさんいることで、地域の皆さんが田んぼに目を向け  
るきっかけにもなっています。

2005年、秋篠宮同妃両殿下をお招きして、コウノトリを放鳥しました。100羽以上飼育  
しているコウノトリの中から、仲良くくらすことのできる優秀な個体を5羽選抜しました。  
ケージの中で飼われているコウノトリは鶏と同じで飛ぶことができませんでした。2年間飛  
ぶ練習と生きた餌を食べる練習をしてこの日を迎えています。お気づきになったと思うの  
ですが、箱を開けた瞬間コウノトリはすぐに飛立ってはくれませんでした。あれは、後ろ  
から棒でコウノトリをつついて飛立たせています。

コウノトリが自然界にかえりますと、コウノトリの採食場の確保が必要になってきます。  
スライドの右側の地図で緑に塗っているところが、“コウノトリ育む農法”をしているところ  
です。これは2008年のデータなので、まだまだ少ないですが、今、面積はこの当時のお  
よそ3~4倍になっています。左側の地図はコウノトリが降り立った地域です。放鳥したコ  
ウノトリには発信機がついていて、個体識別できるようになっています。色が違うのがそ  
れです。不思議なことに、“コウノトリ育む農法”をしているところに、ちゃんとコウノト  
リが飛来していることが分かりました。

コウノトリが自然界にかえりますと、年配の農家さんから、「大事な苗を踏み荒らす害鳥  
だ。あんなものが増えたら困る。兵庫県はその補償をしてくれるのか」と説明会をするた  
びに言われました。私たちはコウノトリが田んぼの中を歩く姿を知りませんでしたので、  
四人一組になってコウノトリの追っかけ調査をしました。朝4時~夕方5時までコウノト  
リが、どの田んぼに行って何歩歩いて何株苗を踏んだかを田植えの時期に2週間程度、3年  
間実施しました。一番多くコウノトリが訪れる田んぼで7000歩コウノトリが歩きました。  
踏まれた株が17株、その内13株は周辺の株と同じように生育して減収にはならないこと  
が分かりました。当初はシカやイノシシの被害と同じように被害を軽減するため、また、  
被害を補償するための施策を検討するための調査でしたが、結果としてコウノトリの害鳥  
としてのイメージを払しょくさせることができました。この結果を色々なメディアを通し  
て地域の皆さんにお知らせして、「コウノトリは害鳥ではないですよ」ということを知って

いただく取り組みをしています。

反対にコウノトリがやってくる地域というのは“コウノトリ育む農法”のような安心・安全なお米作りをしていて、コウノトリを優しく見守る住民がいるということです。そのことを自慢に思っただけのような施策を展開しようということで、県は“コウノトリ舞う田んぼ認証制度”を作りました。“コウノトリ育む農法”を一定面積実践していただき、コウノトリがやってくる地域を表彰する。また、地域の皆さんにそれを見守っていただくための支援金を兵庫県が出すというような取り組みをしています。この認証制度は今も続いており、認証を受ける集落が増えています。

消費者の理解と買い支えも不可欠です。“コウノトリ育む農法”の面積が広がっていきまると、“コウノトリ育む農法”をしっかりと買い支えて下さる消費者の皆さんが必要になってきます。当初は兵庫県だけがPRをしていましたが、現在はJA たじまや3市2町の方が力を合わせて“コウノトリ育む農法”の販売にも力を入れています。

また、次の世代を担う子供たちと共に学ぶということで、“コウノトリ育む農法”を学校の中で実践していただいています。兵庫県では小学校3年生が環境学習を行い、文部科学省のカリキュラムの中では小学校5年生が農業・稲作を学ぶことになっていますので、小学校3年生～5年生の間に“コウノトリ育む農法”を学校の中で、学んでもらう取り組みをしています。

この取り組みは当初、豊岡市の一部の小学校でしかしていませんでしたが、JA 兵庫信連の方がこの取り組みが素晴らしいということで、兵庫県の750の小学校に呼びかけて、一校当たり5万円の活動資金を支援していただき、現在500校近い小学校が学校の中で農業体験できるようになりました。子供達は農家の皆さんから“コウノトリ育む農法”のことを学びます。自分たちでも調べ学習をして、実際“コウノトリ育む農法”を実践します。その成果を地域の皆さんにお返しするというようなことをしてくれています。子供が変われば大人が変わるということで、このような取り組みを通して郷土愛を育めるようになっていますし、子供たちの提案で、地域の大人たちを動かすような取り組みにも発展しています。

コウノトリがすむ環境が地域にビジネスチャンスをもたらしています。“コウノトリ育む農法”のお米はもちろんですが、栽培期間中、化学肥料・化学農薬不使用の大豆も作っていて、その面積も年々増大しています。

“コウノトリ育む農法”のお米を使ったお酒もできています。農薬や化学肥料を使わないお酒づくりは発酵スピードが違うので、腕の良い杜氏さんがいらっしゃるところでないとお酒ができません。全国の腕の良い杜氏さんたちのグループの方々が声を掛け合い、競って美味しいお酒をつくって下さっています。

また、お米を食べる家庭よりもパンを食べる家庭が増えているということで、消費形態に即した新たな需要の開拓もしています。JA たじまとコープ自然派が共同でパン工場を作

ってくださいました。国や県の事業を利用してパン工場を作られて、“コウノトリ育む農法”で作られたお米を利用したパンを販売されています。とても美味しいパンで、売り上げは年々増加していますし、それと併せて多用途米という形で“コウノトリ育む農法”のお米の生産も行われています。

2015年にはミラノ国際万博で日本を代表するお米として“コウノトリ育む農法”のお米が紹介されました。昨年度、日本の優れた文化や産業等を国際的な視点で評価するという賞であるクールジャパンアワードを“コウノトリ育む農法”のお米が受賞することができました。また、一昨年、JA たじまの中にコウノトリ育むお米 GAP 推進協議会を立ち上げ、昨年度、GLOBAL GAP を取得することができました。これによって、オリンピックに"コウノトリ育む農法"のお米を供給しよう、さらに、"コウノトリ育む農法"のお米を輸出していこうという新たなプロジェクトが始動しています。これも、JA にコウノトリ育むお米推進部会を持っていたお陰でこれらのような取り組みができるようになったと感謝しています。

四位一体の普及体制ということで、“コウノトリ育む農法”の推進では、推進部会に対して3市2町のそれぞれの行政が支援をしています。もちろん兵庫県も支援をしますし、JA も支援をする。それぞれの機関がそれぞれの持つポテンシャルを十二分に発揮して"コウノトリ育む農法"の生産者を支援する体制ができています。ちなみに、コウノトリ育むお米生産部会は5つの支部に分かれており、支部同士で競争するように色々な研修会や勉強会を進めていらっしゃいます。全ての支部ではありませんが、生産者の意識を共有化するため、また毎年技術が改良されていますので、技術研鑽をするために部会が開催する研修会には出席することが義務付けられており、出席率の低い生産者は除名されるという、徹底した取り組みをされています。

コウノトリが運んできた夢を描ける地域農業ということで、慣行栽培ではコシヒカリを作っても農協さんにキロ200円程でしか買い取ってもらえませんが、“コウノトリ育む農法”のお米はキロ333円で買い取って下されます。生産者の人が直売する場合にはこの2~3倍の単価で販売されています。

コウノトリの物語性は農産物を買って支える消費者を作ってきました。コウノトリ育むお米は2005年に価格決定しましたが、それからまったく下がっていません。再生産できる価格決定に対して流通業界の理解と応援を得られたことによって、流した汗が報われる価格が実現しています。その結果、若い農業者を中心に将来の夢を託すことが可能になり、“コウノトリ育む農法”は面積を増やしていっています。

これは平成26年で古いデータなのですが、豊岡市の農業共済の一般栽培基準の単収が514キロですが、今のお金の単価、また生産費でしたら所得が71円にしかありません。ところが“コウノトリ育む農法”の無農薬タイプの場合は、平均単収が418キロと少ないのですが、単価が高いということと生産費があまりかからないということもあって、所得が79,541円になります。よって、大型稲作農家ほど“コウノトリ育む農法”を取り入れて経営の安定化

を図るということをされています。お陰様で、最初 70a からスタートした"コウノトリ育む農法"ですが、現在は 540ha に増えています。

天の時・地の利・人の和という中国の言葉があります。コウノトリが絶滅した 1970 年代は、兵庫県の知事であっても農薬や化学肥料を使わない農業を進めることはできませんでした。今、農業を超えて地球環境を守ろうという、まさしく天の時にきているのではないかと思います。

兵庫県北部の地域は、太古の昔から円山川流域の肥沃な大地がコウノトリを育ててきた地の利があります。コウノトリは、「今のままでは人類は危ないよ」「考え方や暮らし方を見つめ直す必要があるよ」ということを、自らの体を犠牲にして私たちに教えてくれたのではないかなと思います。

今、この取り組みに対して分野を超えて色々な方が応援をしてくれています。その背景には、「未来の子供たちに安心・安全な環境を残してやりたい」という大義があり、その大義のために色々な方が利益を超えて応援してくれているのかなと思います。コウノトリが安心して食物をついばむことのできる風景の意味を共有していくことによって、人々の理解と協力の輪ができていくのかなと思います。「天の時・地の利・人の和」、この 3 つが揃ったときにはじめてこの町に生まれて良かった、育てて良かったと思えるような地域づくりができるのではないかなと思っています。

コウノトリが教えてくれたもの。農家の皆さんは最初お米が高く売れるからということでのこの農法に取り組まれるのですが、仲間と一緒に学んでいくうちに価値観がどんどん変わっていきます。そして最終的に、自分の利益ではなく未来世代のことを考える、未来世代への責任ということを実感されるようになります。そして、1 年たつころには、「地域の環境を守る使命があるんだ」というような社会的な使命を持たれるようになっていきます。

ある農家の方が、「僕は、この農法を知るまでは機械で畦の草刈りをしてカエルやヘビを切ってしまうと、歯が欠ける、と不満に思った。家の中でゴキブリを見ると叩いて殺していた。でもこの農法をするようになって自分も生かされているんだということを実感した。今は畦の草刈りをしているときにヘビを切ってしまったら、思わず手を合わせるようになったし、家の中でゴキブリを見ても、はよ逃げや、と思うようになった。人って変わるもんやで」というようなお話をしてくれました。私は、小さな命までも大切に思う、そのような生産者によって作られた農産物を多くの皆さんに食べていただきたいなと思いますし、応援していただきたいなという風に願っています。

"コウノトリ育む農法"の必要性。命を守る本物の農業が社会を変える、ということはこの農法は私たちに教えてくれました。また、未来世代への責任を果たす農業のあり方というものを定義してくれたように思いますし、農業の持つ社会的使命というものを、農家の皆さんにはもちろんのこと消費者の皆さんにもはっきりと教えてくれたのではないかなと思います。

慣行農法は、生産性とローコストを迫り、収益をアップするということをしてきました。しかし、その反面、環境への負荷ということが大きな問題となっています。TPP 時代を迎え、70 倍以上の経営面積を持つアメリカやオーストラリアなどの国々と競争しなければならない時代に、まだ生産性とローコストの迫りをする、これには限界があるのではないかと思います。事実、こういう農業をしてきた結果、農業者の高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加というような今の農業の現状を招いてしまいました。今の稲作農家の時給は平均で 290 円程となっています。こんな少ない時給では、若い世代の人たちに農業をしてほしいなんて言えないな、と思います。

"コウノトリ育む農法"は消費者の皆さんに買い支えていただいているお陰で最低賃金を確保できていますし、農業者の皆さんが社会的使命を感じて農業に取り組んで下さっています。その結果 30 代、40 代の若い農業者がどんどん誕生しています。

地域づくりで必要だと思う事。この取り組みを通して地域の皆さんにお願いをしてきたことが 2 つあります。1 つは、「知恵のある人は知恵を出してください。力のある人は力を出してください。お金のある人はお金を出してください。何も無い人は足を引っ張ることをしないでください」ということをお願いしてきました。2 つ目のお願いは「できない理由を並べるより、まず一步を踏み出してください」。私は豊岡の出身なのですが、豊岡は「弁当を忘れても傘忘れるな」というほどよく雨が降ります。その気象風土によく似てとても根暗です。また、できない理由を並べさせたら天下一品じゃないか、と思うくらいとても後ろ向きです。ですので、そのような地域性を知ったうえで「できない理由を並べるより、まず一步を踏み出してください」、「兵庫県はそのお手伝いを力いっぱいさせていただきます」と約束をしてこの取り組みを進めてきました。

食糧増産という社会的要請の中、化学肥料や農薬を多用して収量を維持することが良しとされた時代の流れの中で、未来に残すべき環境が軽視され、その結果、コウノトリは静かに姿を消してしまいました。

今の世の中は、人の思いが動かしたものです。冒頭で紹介しました神戸大学名誉教授の保田先生のお言葉です。「今まで大人が言ってきたこと。農業なんてしていてもあかんで。田舎になんて行ったってあかんで。そう言うとお子さんを育ててこられたでしょう。そのようになったでしょう。」という風に先生はよく言われます。人々が望んだ通りの未来があるとすれば、「コウノトリがすめる環境をこの地に取り戻したい」そのように皆さんが思っただけならば、そういう未来ができるのではないかと。事実、但馬の地域にはコウノトリのいる環境がかえってきました。

しかし、皆さんもご存知のようにコウノトリには縄張りがあります。親の縄張りに子供はいられません。今自然界に 100 羽のコウノトリが生活していますが、親の縄張りにはすめないので、全国各地にコウノトリが飛んで行っていますが、但馬地域のように安心して子育てができる環境はまだまだ少ないのです。しかし、コウノトリは島根県の地に安住の地を見つけつつあります。この地がコウノトリのすみやすい環境にもっともっとなればい

いな、という風に思います。

最後に、放鳥されたコウノトリが子育てをしている風景を見ていただきたいと思います。

(動画上映)

今の映像は 2005 年に放鳥したコウノトリが子育てをした風景です。子育てをした人工巣塔を兵庫県が建てるときに、地元の皆さんではなく、地権者の方に了解を得て立てました。それまではその地域にコウノトリがいつもやってきていたのですが、人工巣塔を建てたすぐ翌日に、地元の皆さんから「あんなものを建ててくれたら、下で農薬が使いにくくなる」というクレームがきました。そうすると翌日からコウノトリがその地域にびたりと行かなくなりました。びっくりしました。私たちは地域に入って色々な話し合いをしました。老人会、婦人会、子供会、色々と話し合いをして、「シカやイノシシよりはコウノトリの方が良い」という結論が出たところ、その一週間後にコウノトリがやってきました。そしてその人工巣塔で卵を産みました。しかし、どちらか片方の親が必ずいるはずだったのが、2羽とも巣にいなかった間にトビかカラスに卵を落とされてしまい、その年は雛の誕生はありませんでした。その翌年、先程見ていただいた VTR のようにコウノトリが子育てをしてくれました。

5月19日に孵化したあの小さな雛が、わずか3ヵ月の間に親と同じ大きさになります。コウノトリは一日500g程の食物を食べると申しあげましたが、子育ての時期はその3~4倍の食物が必要になります。食物が少ないとコウノトリは子供を間引いてしまいます。今でも、折角雛が誕生したのに、食物が少なくて子供を巣から落とすという悲劇が毎年繰り返されています。

この年2つ卵を生み1羽の雛が孵化しました。どちらかの親が必ず雛に寄り添い、もう片方の親が食物を一生懸命とって子育てをしました。雛がどんどん大きくなるにしたがって、親はガリガリに痩せて可哀想な姿になりながらも雛を立派に育て上げました。コウノトリは巣立ちが近くなると、親が餌をやらなくなります。冒頭、コウノトリは声帯が退化しているので鳴かないと申しあげましたが、雛の間はかすかに鳴くことができます。巣にいる雛は親鳥に餌がほしい餌がほしい、とかすれかすれの声で鳴きます。でも、親はじつと子供に餌をやらずに耐えて雛の巣立ちを促しました。雛は上手に飛立って、親の元に飛んで行き巣立ちを果たしました。このようなコウノトリの子育ての風景を見て、地域の皆さんはコウノトリのすめる環境をこの地域に取り戻さないといけないな、と思って下さったのではないかなと思います。

何もない地域にも必ず地域を救う地域資源がある。私は普及員として、いつもこの言葉を胸に地域活動をしてまいりました。この取り組みを始めた当初、「コウノトリは地域を救う地域資源じゃないですか」というお話をしてもその反応はとても冷やかでした。でも今

は、多くの皆さんが「コウノトリは地域資源かもしれないな」という風に思ったださるようになりました。

コウノトリの野生復帰が終わって、但馬地域には毎年 100 万人の観光客が来られるのですが、その内、コウノトリだけを見に来るお客さんが 19%います。その 19%の皆さんが地域に落とすお金は、平均 3 万 4 千円です。地域に 10 億円近い観光収入をコウノトリはもたしてくれましたし、「コウノトリ育む農法」のお米が高く売れることによって、若い農業者も誕生しています。また、お米以外の作物についても「コウノトリ育む農法」の基準を作って生産振興をしていますし、また、お話ししたように地域の子供達がコウノトリを教材に環境学習をしてきて地域に愛着を持ってきています。大学に行くために地域を一時期は離れるかもしれないけれど、でもまたこの地域に帰ってこの地域が良くなるような、そんな仕事をしたという子供たちがたくさんいてきています。コウノトリは農業者にお米を作る社会的使命を気付かせてくれましたし、我々に日本文化や健康の源である田んぼの大切さを教えてくれました。そして何よりも、「未来を担う子供たちに豊かな環境を伝承していきたい」という思いをコウノトリは持たせてくれたんじゃないかな、と思っています。

本日は兵庫県の環境創造型農業のモデル事業でもあります「コウノトリ育む農法」の紹介をさせていただき機会をいただき、心から感謝しております。ご清聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：やはり、お米の売り先の開拓が難しい。お話を伺っていて、コウノトリのブランドで、それをいいお値段で買い支えてくれる人がいることがすごく大事だと感じました。JA が販売に加わっておられるということでしたが、売り先は意外にすぐ見つけられたのでしょうか？もともと JA の販売ルートがあったのでしょうか？例えば、兵庫県なら神戸の方に売られたとか、そのあたりを教えてください。

西村氏：販売にはとても苦労しました。「コウノトリ育む農法」ができた当時は、まだコウノトリは全然有名ではなかったですし、「コウノトリ育む農法」という名前もまだついていませんでした。JA に販売のことをお願いすると、「結局、尻拭いは JA なのか」と言われましたので、3 年間くらい生産技術指導と並行して、県の職員が販路の開拓ということで売り歩きました。

ほとんど断られましたが、その中で何件か、「我々は販売のプロだから」と、応援して下さるところがみつき、一点突破で売ることができました。その頃は面積が少なかったのですが、県の職員の行動の範囲で何とかなりましたが、今は面積がかなり大きいので 8 割がた JA にお世話になっています。

JA たじまの凄いところは、“コウノトリ育む農法”の推進をするのに JA のお米の 3 本の柱の中に、まだ面積が 1ha もない“コウノトリ育む農法”を柱の 1 本に据えて、振興するという事を総代会で意志表示をして下さったこと。それから全農にお米を販売すると売れなくても売れても担保があるので JA はとても楽ですが、それを全部やめて米穀課という課を立ち上げ、リスクを全部担当が背負う形で販売に着手して下さいました。そのために、精米工場を整備する等のことをして下さいました。

全農には、保険の代わりに 1000 円／袋のお金が渡るらしいのですが、それを生産者に返し、生産者の手取りを多くするという英断をしてくださったことで、生産者が増えましたし、販路の開拓にもとても力を入れて下さいました。

もちろん豊岡市をはじめとする 3 市 2 町の市役所、役場の皆さんも“コウノトリ育む農法”の販売について支援をしていただき、県と行政と JA が販売関係のお金を出し合って PR をしています。例えば、片岡愛之助さんに何千万円もかけて CM をしていただいています。その費用も県と市と JA が折半をするという形で PR をしていただいています。毎年、販路の開拓には力をいれていただいております、そのお陰もあって当初定めた販売単価が維持されている状況ではないかと思えます。

質問：“コウノトリ育む農法”のお米を全国に売っているというお話でしたが、佐渡のトキ米など、環境配慮型・高付加価値型のお米がたくさん出ていると思います。それらのお米との競合に対する対策や対応はどのように考えていらっしゃいますか？

西村氏：実際は、まだまだ生産量が足りないので、イトーヨーカ堂のように全国に販売網を持つ所であっても、関西限定といった販売方法になっています。その他、有名百貨店等でも販売されています。量として多いのは生協、コープ自然派での販売です。

確かに、生き物銘柄米は全国数多くあり、競合することもあるでしょうが、むしろ、それをプラスと捉えたいと思います。生き物銘柄米が一般の消費者の間にきちんと理解されるようになれば、より付加価値の高い生き物銘柄米が評価されるようになると思いますし、生き物銘柄米が各地で増えることで、生物多様性や環境に対する理解が広がっていく、そうした消費者教育につながれば良いと思います。